

ヒュームにおける対象同定の問題

伊 勢 俊 彦

ヒュームの哲学において、我々の事實的知識の対象である世界、すなわちいわゆる外的世界の諸存在が、一般的に言ってどのような特徴を有するかということは、厳密な意味での知識の問題ではなく、自然的信念の問題である。この自然的信念は、因果性に関する自然的信念と共に、我々の事實在存在に関する判断の基礎をなす。

ヒュームにおいて、直接的に明証的な知識の対象は内的な知覚、⁽¹⁾すなわち、印象とそれに対して力と生氣において劣るが他の点ではまったく異ならない写しである觀念とである。まず問題となるのは、外的存在は知覚に対してどのような関係に立つかということである。

この点に関して立場を異にする二つの見解が検討の対象になる。「通俗の見解」、すなわち我々が理性的推論を意識的に用いることなく自然に採用している見解は、外的存在を直知の対象とみなす。これに対して「哲学的見解」、すなわち外的存在の知識に関する代表的な哲学的教説である表象説は、外的存在を直知の対象とみなさず、その内的な表象のみを直知の対象とする。

ヒュームが『人性論』の「感覚に関する懷疑」の節で取り扱っている問題は、「いかなる原因が我々を導いて物体の存在を信じさせるか」(T 187)⁽²⁾、すなわち外界に関する見解の発生の根拠についてである。ヒュームにおいては、ある見解の発生的根拠を問うことと、その正当化の基礎を問うことが、本源的印象への還元を試みを通じて同時に行なわれる。

この問いを問うに際して主に議論の対象となっているのは、外界に関する「通俗の見解」である。「哲学的見解」は、「通俗の見解」に対する反省から生じるものであり、まず我々が「通俗の見解」に従う形で外界に関する信念を抱いていない限り、精神に対して影響を与え得ない。

外界に関する見解は、感覚、理性、想像のうち、どの精神の働きによって生みだされるのだろうか。ヒュームによれば、それは感覚によって直接に与えられるのでも、理性的推論によって導かれるのでもない。それは想像の働きによって生みだされるのである。

ヒュームは、外的存在の問題において、連続した存在と、精神から別箇な存在とを区分する

(T 188)。後者は更に、空間的な意味での外的存在、すなわちその位置と、精神から独立した存在とに分けられる。ヒュームが主に論じているのは連続存在と独立存在とに関してであり、まず、印象の恆常性と整合性から、「通俗的見解」に従う形で外的対象の連続存在の見解が生みだされる仕方を示し、然る後に、連続存在の見解の論理的含意として得られる独立存在の見解の問題点を論ずるという論の進め方をとっている。

我々が、持続を有するものとして表象し得るのは、何も外的対象に限らない。外的対象について特にその連続存在が言われる意味にはそれ以上のものがある。この場合、連続は、感覚による直接の観察が一時的であり中断していることに対比されている。我々は外的対象に我々が帰している連続存在を直接観察することができないと言われ得る意味が確かに存在する。ヒュームが外界に関する見解の発生的根拠を解明するに際して行なった議論の本体は、外的対象の連続存在の見解の分析である。

本稿は、ヒュームの言う外的対象の連続存在の見解を、我々が継時的に区別可能な複数の観察機会を通じて対象を同定する際に抱く基本的想定であり、再同定的な同一性判断の基礎をなすものと解して、ヒュームの議論を再整理し、その意義を明確にしようとするものである。

I

ヒュームは、常人が外的対象とみなす印象に特有の性質である恆常性と整合性が、対象の連続存在の見解を「生みだし」「生ぜしめる」と言う(T 194, 195)。すなわち、印象の恆常性と整合性は、連続存在の見解の原因である。我々はこれを、感覚の対象が恆常性と整合性という特有の仕方をもって現われるが故に、我々はその対象を連続存在を有するものとみなし、対象の再同定を行なうというふうに、判断の基準ないし証拠について述べたものとして解釈する。

「我々が連続存在を帰するすべての対象は、それらをその存在が我々が知覚することに依存する印象と区別する特別な恆常性を有する。今私の眼下にあるこれらの山々、家々、木々は、これまで常に同じ配列で私に現われていた。そして私が眼を閉じるとか頭をそむけるとかしてそれらを見失うときも、私はその後すぐにそれらが少しも変わらずに私に再び現われるのを見出すのである。」(T 194-95)

「だが、この恆常性はかなりの程度の例外を容れないほど完全ではない。物体はしばしばその位置や性質を変え、少しの不在や中断の後、識別しがたくなることもある。だがこの場合、こうした変化においてさえ諸物体は整合性を保ち、互いに規則的な依存を有することが観察できる。(中略)私が一時間の不在の後私の室に戻る時、私は、暖炉の火が私とその傍を離れた時と同じ状態にあるのを見出すわけではない。だがその場合、私は他の場合に、私がそこにい

ようといまいと同様の変化が同様の時間の間に生みだされるのを見慣れている。」(T 195)

ヒュームは、恒常性と整合性があたかも印象の性質ではなく対象の性質であるかの如く、その説明に既に対象の通時的同一性を前提する用語法を用いている。しかし、対象の通時的同一性という概念自体、印象の恒常性から説明されるのだから、恒常性と整合性とを、印象の性質として述べ直しておくべきだろう。

印象の恒常性に対応する対象における事態は、対象が、知覚することの中断にも拘らず、位置と性質を変えずに現われることである。印象の恒常性は、間に中断をおく、従って互いに区別され得、数的に異なるとみなされる印象が、同じ空間的配列及び感覚的性質を示すことと言えよう。

印象の整合性に対応する対象における事態はその変化の規則性である。暖炉の火の変化は、観察の中断に拘らず同様である。私の観察に中断のない場合、私は時刻 t_0 に印象 A、 t_1 に B、 t_2 に C と漸次的に変化する一連の印象を得るとする。観察が中断を含む場合、私は時刻 t_0' に A'、 t_2' に C' という印象を得る。中間の時刻 t_1' における印象は欠けている。だが、 $t_2 - t_0 = t_2' - t_0'$ であり、A と A'、C と C' はそれぞれ等しい空間的配列と感覚的性質を示す。

対象の通時的同定の問題を考察するに際して、位置と性質の不変な対象の同定はより基礎的と言える。⁽³⁾ 故に我々は、ヒュームの叙述とは逆の順序をとって、不変な対象の同一性の基準が論じられる恒常性からの議論をまず検討し、然る後に整合性からの議論の検討に移る。

II

同一性を表わす言明は「ある対象がそれ自身と同一である」という形をとる。この言明が有意味であるためには、「対象」という語の表わす観念と「それ自身」という語の表わす観念とが区別されねばならない。(T 200)

然るに、単一の対象からは単一の観念しか得られないから、「対象」と「それ自身」は区別され得ず、単一性の観念が得られるのみで同一性の観念は得られない。また、複数の対象からは数多性の観念が得られるのみで同一性の観念は得られない。同一性の観念の由って来たる対象の印象を求めようとすれば、それは一であるか多であるかであって中間はない。だが、同一性とは単なる単一性ではなく、もちろん数多性でもない。従って、同一性は、同一性の帰せられる対象の印象のみによっては示されない。(Loc. cit.)

「この困難を取り除くために、時間あるいは持続の観念に頼ることにしよう。」(Loc. cit.)

ヒュームによれば、すべての観念にはその由って来たる本源的印象が存し、観念はその本源的な印象の範囲を超えて適用されてはならない。ところが、時間の観念の源である印象は、継

起する、従って変化する印象である。同一性の観念が得られるのは、時間の観念をその本源的な印象の範囲を超えて不変な印象に適用することによる。これは想像の作用による。(T200-01, Cf. T 37, 65)

「我々は、ある時点で存在する対象が別の時点で存在するそれ自身と同一であるということ意味するのでなければ、適切な言い方として、ある対象がそれ自身と同一であると言うことはできない。」(T201)

同一性ということを理解するには、対象の異なった時間的相の区別が可能でなければならぬ。この区別は、諸々の事物の変化しゆくあり様と相対的に、不変な対象を把握することによって可能となる。このような把握をなすのは、単なる感覚的直観やヒュームの限定された意味での理性ではなく、想像の働きなのである。

同一性の最も厳密な定義は次のように与えられる。

「個体化〔同一性〕⁽⁴⁾の原理は、精神が対象を存在の別々の時点で中断なく見てとり、かつ数多性の観念を作ることを強いられることなくたどることを可能にするような、想定された時間の変化を通じての何らかの対象の不変と不中断に他ならない。」(Ibid.)

一般に同一性とは数的に一であることを他ならず、上の定義も、同一性の観念の本源的な印象は数的に一であることを含意している。ところが、恆常性を有する印象は定義により中断を含む。中断の前後の印象は、どれほど類似していようと、別箇なものと見なし得る数的に異なる印象である。

にも拘らず、我々は恆常的な印象において対象の同一性を見てとるのである。ヒュームはこれを、印象の類似性からの観念連合によって説明する。(T202-04)

観念連合の原理によって、印象の恆常性からの同一性の判断の自然さを説明し得ても、何故にそれが無矛盾と見なされ得るかは、別の原理による説明を要求する。この原理が対象の連続存在である。(T205)

連続存在が帰せられるのは、我々が直接に知覚するものであり、我々はそのようなものについて、我々がその前にいない時にも、それはなお存在するが、我々はそれを感じず、それを見ないと語り、我々がその前にいる時には、それを感じ、見ると語る。(T206-07) このような語り方はいかにして適切、無矛盾と見なせるのか。

「さて、すべての知覚は他の知覚と区別でき、分離して存在するものとして考察され得るから、どの個的な知覚を精神から分離することにも、すなわち、どの個的な知覚の、思考する存在をなす知覚の結合された塊りととのすべての関係を断つことにも、何の不合理もないことが明らかに帰結する。」

「知覚という名が精神からのこの分離を不合理かつ矛盾したものとしなければ、対象という名は、まさに同じものを表わすのだから、それらの〔精神との〕連結を不可能とはし得ない。外的対象は、見られ、感じられて、精神に現前するようになる。すなわち、外的対象は、知覚の結合された堆積に対し、現前する反省と情念によって知覚の数を増し、記憶に観念を供給することで非常に大きな影響を与えるような関係を得る。それ故、同じ連続し中断のない存在が、存在自身には何らの実在的、本質的変化もなしに、時には精神に現前し、時には現前せぬことができる。」(T 207)

ヒュームは、我々の知覚するもの——知覚と対象と、両方の名で呼ばれる——が我々が知覚しない時にも存在することが、無矛盾に想像し得、従って論理的に可能であることを明らかに認めている。かくして、恒常性の定義に含まれる観察の中断は、対象の同一性に矛盾せず、同一性の基準から対象の精神への現前の不中断は取り除かれる。(T 208)

ところが、ヒュームは対象の連続存在に論理的矛盾はないと言いながら、一方では恒常的印象から対象の同一性と連続存在を見出すことを、「誤り、ぺてん」(T 202)あるいは「虚構」(T 205)「捏造」(T 208)などと呼んでいる。何故であろうか。

我々の知覚する対象の連続存在はそれ自体としては無矛盾に想像し得るとはいえ、ヒュームが当時の哲学的常識として承認している「観念の理論」⁽⁵⁾とは明らかに衝突する。これによれば、「すべての知覚は本性上内的で一時的であり、そのようなものとして現われる」のである(T 194)。

一時的と区別された意味で内的と言うのは存在の非一独立を指すのであろう。非一独立は非一連続を含意する。この意味で知覚が内的であるという主張がもし分析的ならば、連続存在は論理的に不可能である。上に引いた箇所のような記述では、この主張は分析的なものと考えられていると受け取られかねないが、現在検討している議論のすじ道、また、対象の独立存在に関する議論(T 210 ff.)を考えあわせると、印象が内的であることを分析的とするのは、ヒュームの公式の考えとは言えないだろう。これを偶然的事実として主張する議論は、別の機会に検討することとし、ここでは、印象が一時的であるという主張に関わる問題に話を絞りたい。

ヒューム式の観念の理論によれば、我々の受け取る印象は、たとえどれほど類似しているにせよ、観察の機会ごとに存在として別であり、新たに生じるものなのである。これが印象が一時的であるということの意味である。恒常的な印象から対象の同一性の観念を得ることは、中断を含む数多的印象と、それ自体としては単一な持続的印象との混同によるのであり、観念の理論の立場から見れば、決して消すことのできない矛盾を含んでいるのである。言い換えれ

ば、同一性の概念の定式と観念の理論の定式からして、恆常的印象から同一性の観念を引き出すことは、矛盾なしにはできないように仕組まれているのである。

観念の理論に従い、我々の知覚するものは上の意味で一時的であるという主張を保持しながら、同一性の概念に異なった説明を与えることによってこの矛盾を解消しようとするのが H. Price である。Price は次のように言う。⁽⁶⁾

ヒュームの同一性の定義は単一の持続的な印象を出発点とする。しかし、我々の経験においては、いかに不変なものであれ、厳密に数的に一成りなる持続的な印象ではあり得ない。不変で持続的と見なされるものもまた、継時的な個の系列である。なぜなら、第一に、不変で連続的な系列において、実際には中断が見出されないとしても、中断があり得たと考えることはできるから、不変で持続的なものは分割可能である。第二に、不変な系列と同時に経験される他の系列は絶えず変化しているから、不変な系列をなす個は同時存在する個に対する関係において互いに異なり、区別される。観念の理論をとる限り、同一性に関しては、持続的な対象を瞬間的な個＝事象の系列とし、対象の同一性を事象の系列の同一性と解する事象説 (the Event Theory) をとらねばならない。過程とその基体とを区別し、対象の同一性を変化せぬ基体の同一性と解する基体説 (the Substratum Theory) はとり得ない。従って、知覚することの中断のあるなしに拘らず、対象の同一性は事象の系列の同一性であり、印象は単一ではない。故に、知覚することの中断と対象の同一性は矛盾せず、同一性の判断に「虚構」は必要でない。

Price の言い分は首尾一貫している。ただし、同一性の概念をこのように説明することは、我々の意識に直接に現前するものとされている印象や観念というものの性格を変えることになる。Price は、我々の同一性の判断の対象を瞬間的な個の系列とすることによって、我々の日常的な判断の対象と我々の直接的意識の対象の単位を区別している。Price にとって、我々が日常的な判断において個物として理解しているものと意識の対象としての究極的個物とは最初から別ものなのである。

ヒュームは、対象において識別できるような変化が認められないとしても、その各時点の存在は互いに論理的に独立とみなされねばならないというような立場はとらない。ヒュームが、常人の見解においては対象と知覚との区別が存在しないとしていること (T 202) は、印象と観念とは、我々がそれにもとづいて判断を行なうものであると共に、我々がそれに関して判断を行なうものであることを示唆している。だからこそ、対象の同一性の概念の基礎に、単一の持続的印象が置かれるのだ。対象の同一性の判断において、我々は、判断の対象を数的に一成りであると見なすと共に、我々の判断の根拠である、我々が直接知覚するものを、数的に一成りであると見なすのである。

Priceのような仕方で、説明されるべき同一性の概念の方を改作することを欲せず、また、基体説をもとらないとすれば、我々は観念の理論を離れることによってしか、同一性の概念を無矛盾なものとして説明し得ない。ただし、我々は既に、我々の知覚するものがある意味で一時的であることを免れないことは認めている。そのことは、観念の理論において、印象が一時的であると言われることと、どう異なるのであろうか。

我々の知覚するものが一時的であるということの意味は、我々が知覚するものとして指示するものが、同一性を有するものとして指示するものと同じだということを顧慮して定めねばならない。だとすると、我々が知覚するものが一時的だというのは、それが一時的な存在であるということではなく、我々が知覚するものは連続存在を有するが、我々はそれを一時的にしか知覚し得ないということを意味するとすべきである。

ヒュームは、観念の理論を根本的には疑問に付することなく受け入れているがためにこの區別をなし得なかった。この區別を行ない、観念の理論から自由な地点においてヒュームの議論を考察すると、ヒュームが対象の同一性と連続存在をその現われの恆常性から説明する仕方はきわめて明晰で自然と思われる。

我々が対象を知覚せず、対象の存在に直接観察による明証を持たない際にも対象の連続存在を想定するという意味で、同一性の判断は想像の働きに依存する。しかし、それは内在的に誤りや矛盾を持つものではない。我々は、我々の知覚するものを連続存在を有する外的対象そのものであるとみなし、それが、我々の知覚することの中断にも拘らず、同じ空間的配列と感覚的性質を有するように見えるが故に、同一性を保つと判断するのである。

Ⅲ

次に、対象に変化が認められ、我々が整合性から対象の連続存在の見解を得る場合の同一性の基準は、上の、対象が変化せぬ場合の基準のいかなる拡張によって得られるか考察しよう。

ヒュームは『人性論』第一巻第四部第六節中で変化するもの一般の同一性の問題に触れ、我々は何故に変化する、すなわち、継時的に現われる異なる対象(印象)に誤って同一性を認めるかということについて論じている。ヒュームの説明は、印象間の容易な推移という観念連合の原理による。(T 253-55)

ヒュームが取り扱っているのは感覚的性質の変化である。位置の変化は、同一性の判断に何ら影響を与えないとされている。

「諸部分が近接し結合されている何らかの物質の塊が我々の前にあると仮定する。すべての部分が中断も変化もなく同じままであるとすれば、全体あるいはいずれかの部分にどのような

運動すなわち場所の変化が観察されようとも、明らかに我々はこの物質の塊に完全な同一性を帰さねばならない。」(T 255)

これには二つの理由があろう。第一に、ヒュームはここでは知覚することの中断の問題にさしたる顧慮を払っていない。中断の前後に、感覚的性質においては互いにまったく区別できないような対象が現われるとしても、その位置の相違いにかんよつては、果してそれが同一の対象か否かが実際に問題となり、その理論的検討も必要になる。⁽⁷⁾

第二に、ヒュームにとっては、位置の変化と感覚的性質の変化とでは、その意味がまったく異なる。位置は対象自体が変化することなしに変化し得る(Cf. T 69)。ヒュームは、対象を他の対象との関係から切り離して考察しようとする傾向があるので、対象の他の対象に対する外的関係である位置の変化は、対象の内的属性である感覚的性質の変化と異なり、同一性に関して何ら問題とならないと考えていると思われる。

感覚的性質の変化にも拘らず、対象の同一性の判断を成り立たしめる条件として、三つのものが挙げられる。

第一に、変化を被る部分の大きさの全体に対する割合。「ある物体の場合には、ほんの数インチの変化で同一性を失わせることができようが、山を一つ付け加えたり取り去ったりしても、惑星に数的差異を生み出すには十分でないだろう。」(T 256)

第二に、変化が段階的に、知らず知らずのうちに起こること。

第三に、部分間の相互連関と共通目的への協同。これは例えば船のような、特定の目的に供するために作られた人工物にも、生物にもあてはまる。生物の場合、諸部分はその作用において相互に因果関係を有するという、より強い関係によつて、相当の期間を経、形状、大きさ、それを構成する物質において、何ら以前と共通のものを持たない場合でさえ、同一性を保つとされる。(T 257)

これらに関するヒュームの叙述は例証による説明の域を出ないが、これらの条件が、同一性の基準としてどう働くかという見地から、その含意を検討する。

変化を被る部分の大きさの全体に対する割合、及び、対象の部分が結合されている共通の目的が同一性の基準として働くには、対象が、何として同一であるかという形で、対象の属する類概念が理解されていなければならないであろう。類概念の理解は、類概念に依存しない、個的对象のより基礎的な同定に依存する。故に、これらを基準として用いる同一性の判断は、派生的部類に属する。

これに対し、変化が段階的に、知らず知らずのうちに起こるということはより基礎的な条件と言える。ここで言及される変化は感覚的性質の変化だから、これを変化の質的連続と呼ぼ

う。

感覚的性質の変化する対象の同一性の基準は、第一に、変化の質的連続である。これに、類概念に依存する場合の同一性の条件として、対象が別の類に属するものに転化せぬことを付け加えることができよう。

位置の変化に関しても、感覚的性質の変化の場合と同様、同一性の基準として連続性が考えられる。⁽⁷⁾これを空間的連続と呼ぼう。

対象の位置は他の対象の位置に相対的に定まるから、対象の位置の変化がいかなるものであるか定めるには、位置の不変な対象が存在せねばならない。多くの対象は位置が安定しており、恒常性を有するものとして観察される。我々は、恒常性を持って現われる対象を基準に、対象の位置の変化を測ることができる。よって、我々の観察の中断の前後に現われる、同じ感覚的性質を有する対象が、連続的に位置を移動した同一の対象か否かが判断できる。

以上の観察から、変化する対象における同一性の基準は i) 変化の質的および空間的連続という、より基礎的な条件、ii) 同一性の判断が類概念に依存する派生的な場合の条件として、変化の前後で、対象が同一の類概念に属すること、の二つにまとめられる。

概念の理論の見地からは、変化する対象は、継時的に現われる互いに異なる数多的印象と見なされる。だが、常人の見解では、対象の同一性という概念は、対象の変化のあり方に関する想定を含み、その想定に合致する限り、変化する対象は同一と見なされるのである。この基礎的な想定が変化の質的・空間的連続に他ならない。従って、変化する対象の同一性の判断の知識論的地位は、変化の質的・空間的連続の想定の上に依存する。

この想定は偶然的事実に関するものであるから、ヒュームにおいて、その正当化の成否の基準は、経験からの推論、すなわち因果推論の帰結としての認否にかかっている。経験による明証という観点から見た場合、対象の変化のあり方に関する想定は、その変化の規則性の想定である。

規則性と質的・空間的連続とは論理的に独立だが、対象の変化の規則性がその連続存在と同一性の判断を生み出す想定として用いられるためには、変化の質的・空間的連続が規則性の内容でなければならない。そして、整合性からの連続存在の見解が依存する、対象の変化の規則性の想定を検討は、整合性に関するヒュームの議論の核心なのである。

因果推論を行なうには、我々は、過去に印象の恒常的接続を経験することによって、ある対象の印象からそれに伴う対象の概念に容易に推移する精神の習慣を獲得しているものでなければならない。然るに、我々の感覚による観察は絶えず中断を含むが故に、対象の変化の完全な知覚を得ることはできず、我々の知覚の規則性（整合性）は、我々が外的対象に想定する規則性

に対しては常に部分的規則性にとどまる。対象の変化の規則性の想定は通常の因果推論の帰結たり得ず、その原理は想像の働きに属する。(T 197-98)

変化する対象の同一性の判断が依存する変化の質的・空間的連続の想定こそ、ヒュームが整合性からの議論において検討しているものに他ならない。そしてヒュームは、この想定を知性的推論の帰結としては否定しながら、その実際的な不可避性・有効性を認め、それ故にこそ、探究の対象としているのである。

外的世界の諸事物が我々に対して外的であるということの端的な意味は、我々の意識からの独立にある。とはいえ、独立存在の見解は連続存在の見解の含意として得られるとヒュームも言うように(T 199, 210)、これまで述べてきた、対象の通時的同定の基礎的想定をなすことにおいて、我々は、外的世界の諸事物のふるまいに関する一般的想定をなし、世界を、独立した存在を有する諸事物に満ちた世界として把握するのである。

これらの想定は、なかならず、対象の存在の時空的枠組みに関わっている。我々は、恒常的な現われ方をする対象を、我々の知覚することの制約を超えた持続を有し、空間的に安定した位置を占める不変な対象と見なし、整合的な現われ方をする対象を、質的・空間的に連続的に変化する対象と見なすことにおいて、時間を、継起する知覚に従属した概念ではなく、諸事物の存在の枠組みとし、空間を、感覚知覚の映写幕ではなく、独立存在を有する諸事物がそこにおいて位置を占めつつ存在する枠組みとして把握するのである。

ヒュームは、これらの想定を検討において、想像の働きを正当にも強調し、彼の言う、想像の、「永続的、不可抗にして普遍的な原理」(T 225)の作用を、目ざましい姿で示しているのである。

〔哲学 博士課程〕

註

- (1) ヒュームは、知覚(perception)という語によって、知覚するという作用ないし行為ではなく、知覚されるもの、意識の直接の対象である内的表象を指す。本稿では単に「知覚」という場合、この意味でこの語を用いるものとする。
- (2) 「T 187」はDavid Hume, *A Treatise of Human Nature*, ed. by L. A. Selby-Bigge, second edition, O. U. P., 1978, の第百八十七ページを指す。傍点は原文イタリック。

- (3) 不変な対象の同定が変化する対象の同定に経験的事実として先立つという意味ではなく、
不変な対象の同定を可能にする条件が、変化する対象の同定にも不可欠であるという意味に
おいて。
- (4) [] 内は筆者の挿入である。
- (5) J. Passmore, *Hume's Intentions*, third edition, Duckworth, 1980, p. 89.
- (6) H. H. Price, *Hume's Theory of the External World*, O. U. P., 1940, pp. 44ff.
- (7) 「物体はしばしばその位置と性質を変え、ほとんど見分けがたくなることもある。」(T195)

Hume on Identifying

Toshihiko Ise

I read Hume's argument about our opinion of the continued existence of objects as an account of our fundamental assumptions in identifying them through temporally distinguishable occasions of observation. He distinguishes in the external existence of objects the continued and the independent one. The former logically implies the latter. In thinking of the externality of objects, we tend to have in mind only their independence of our observing them. We can even say that independence is the primary meaning of externality. But, though continuity is implicit in the opinion of externality, we can get to the opinion of independence only in having that of continuity. Namely, we recognize external objects as such only in making the fundamental assumptions in identifying. These assumptions concern mainly the spatio-temporal framework of the external world. This framework makes constancy and coherence of appearances the cues to recognition of external objects. In seeing the objects with constant appearances as unchanging, spatially stable ones, we take time, not as dependent on successive impressions, but as the framework in which continuous objects exist. And in seeing the objects with coherent appearances as ones changing in a qualitatively and spatially continuous manner, we take space, not as a screen of fleeting sense-impressions, but as the framework in which independent objects locate. It is the imagination that provides this framework in forcing us to make those assumptions in identifying. Namely, the imagination makes the world appear to us as such.